創作ミュージカル、『The Four Seasons』
－本質的な教育のあり方の一例－

客員研究員　小早川裕子（国際地域学　非常勤講師）

『The Four Seasons』のフィナーレ

最近の日本の学校現場では「いじめ」が深刻な問題となっている。いじめはどの時代にも存在してきた。昔と今の「いじめ」の違いは、「痛み（加減）が判る」いじめと、リセットが可能なバーチャルな世界に生きる「加減が判らない」子供たちによる、いじめの「差」にある。生み出されたその「差」は、あまりにも悲劇的だ。

この問題を解決する手段は学校だけに求められるものではない。家庭、学校、そして、地域が、豊かな想像力をもって自他に優しく思いやりのある子供たちを育む教育の場でなくてはならない。人はそれぞれ異なるということを知り、受け入れることができたならば、そして、人と違うことを恐れず、勇気を持って様々な形で自分を表現することができたならば、尊い命を失うようないじめはおのずと消滅していくであろう。そう強く信じたいものだ。個性への尊重や個人の失敗に寛容さを失ってしまった学校社会からどのように脱却できるのか。その一つの策として、地域力を生かしたミュージカルをここにご紹介したい。

突然、奪われてしまった尊い命…大木は泣き崩れる。

本題の音楽劇『The Four Seasons』は、家庭･学校･地域が一つになることで成し得た大作だった。今年 8 月 9 日に群馬県みどり市にある笠懸野文化ホールにて上演された『The Four Seasons』は、ぐんま国際アカデミー（GKA）が主催した。「英語教育特区」である群馬県太田市の GKA は、小学校から高校まで英語で授業を行う国のモデル校である。一方、プロデューサーを勤めたのは、ウィーンを拠点に 20 年来オペラ活動を続けている中嶋彰子氏である。音楽劇の台本は、GKA の生徒たちから寄せられた 600 点以上の四季に関する作文、詩、俳句、絵を土台に中嶋氏によって書かれた。「イマジネーションは人間を豊かにし、幸せを膨らませ、私たちに生きる力を与える」と語る中嶋氏には、音楽･衣装･メイク･舞台・演出･ダンスなど各方面で活躍中の一流の仲間が協力した。ミュージカルに出演した小中高生は 124 人で、舞台上、舞台裏では総勢およそ 130 人にも及ぶ地元ボランティアが協力した。

『The Four Seasons』は、擬人化された動物や植物が森の生活の豊かさや厳しさを体験し、仲間の存在のすばらしさを悟っていく過程を表現した。8 日間のワークショップ期間は子供、親、教員、地域ボランティア、そして、各分野のプロも含め、携わった全員にとって正に互いの違いを学び、受け入れ、仲間として融合する、その過程であった。例えば、ワークショップの初期段階では、創作ダンスに出演する高学年の生徒たちは難しい年頃で、指導するプロダンサーが目指すレベルとのギャップは埋め尽くしがたいように思えた。また、中学年の合唱練習では、一生懸命練習することが格好の悪いかのような雰囲気で覆われていた。そんな生徒たちに何が変化をもたらせたのか。その要因は多様であり、断定することは難しい。ただ、彼らの前には、人と違うことを全うしてプロになった理解者がいた。衣装や舞台道具のデザインと作製、また、ワークショップの運営と、寝る暇も惜しんで頑張る父母、先生、地域住民がいた。何が子供たちを動かしたのかは定かではない。あるとすれば、そんな真剣な大人たちの姿だったのかもしれない。

森に振り落ちる粉雪。皆の心が一つにまとまった。

『The Four Seasons』は大成功だった。子供たちは見た者に感動を与えた。終了後、バックステージでは大人たちが抱き合って涙した。その情景を見て、子供たちも涙した。個々人の違いや立場を超え、大作を成してこそ得られる感動がそこにあった。『The Four Seasons』に携わった子や大人は生涯忘れられない経験をした。この経験が今後も何らかの形で引き継げられ、感動多き社会へと発展することを望んでやまない。